

生活目標形成とケイパビリティ

乗本 秀樹

Formation of Daily Lives Objectives and Capability

Hideki NORIMOTO

Summary

The issues discussed in this paper are as follows.

First, various examples of the visions on closed life and opened life are examined from the view point of mentalities working in each life.

Second, the possibility of the idea of capability proposed by A.Sen is prospected. That is, the idea recognized as a kind of life indicators for an opened life could be the daily lives objectives which bear very important roles in life management theory.

キーワード：ケイパビリティ、生活指標、生活目標、開かれた生活

1. はじめに

前稿で、私たちがふだん抱いていると思われる生活目標群を例示し、そこに A.センのケイパビリティ(潜在能力)と類似の特徴がうかがわれることを指摘した¹⁾。併せて、この類似性の発見は筆者がケイパビリティ概念を表層的にとらえていることによるかもしれないので、より深く生活観の層においてとらえなおさなければならないことを示唆した。

そこで、本稿では、生活の展開を支えるエートスないし心のはたらきという観点から、生活観の多様さを垣間見る。そこに見られる例を通して、社会ないし人生(時間)に開かれた生活目標への可能性を示唆するものとして、センのケイパビリティを位置づけておきたい。

2. 閉じた生活観

(1) ものがたりを紡ぐ生活

筆者はかつて、近代・前近代を含む多様な生活を念頭に置きながら、家族や地域などの生活の場に展開する心性を5つに整理した²⁾。

それによると、まず、生活場の外に生じる事態に適応したり生活場の内に生じる問題を解決するために、新しい考えや手法をとり入れようとする心性がある。これを「革新」(イノベーション)と呼んだ。第二に、人と人が、あるいは人が自然に「共感」する心性があり、第三に「伝統」を重んじながら日々を展開する心性がある。これらが闊達に展開するとき、生活場には「ものがたり」が醸成されるとともに、「技術」が形成されてゆく。

たとえば、横川公子が描く「衣類が『買うもの』ではなく『作るもの』だった」時代の「古い衣の生活」から、5つの心性に因む記述を拾い出してみよう³⁾。

- 革 新……縞見本を貼った「縞帳を貸したり借りたりして、よい縞を考案しようとした」
(『家政知を考える』(以下も同様)、p.85)。
- 共 感……「(共同作業) …つらい勤労を共同で、しかも楽しみながらする」(p.87)、「自然のリ
ズムに合った生活」(p.93)。
- 伝 統……慣習になっている諸作業(「カラムシの栽培」「糸くり」「機織り」など)、「どんな場合
にはどんな物を着るかといった基準」、「村の歴史や各家の歴史についても詳しく、
何を着たらよいかについて拠り所となる見識」(以上、p.89)。
- ものごたり……「機能的なものの美しさへのゆかしさ」、「糸機の道を体験した者だけがわかる織物
に対する知識と技術の深さ」、「(つづれさし) …在来の習慣として守り育ててきた
ような呪術的な表現や暮らし方のベースや差異を表現するといった極めて精神的な
充足」(以上、p.91)、「祖先の感受性やあこがれに対するゆかしさ」(p.93)。
- 技 術……「衣服づくりの全望…衣服をつくるという全体像を掌握…勘、『手の能力』『身体
の能力』、「手廻しよく、手際よく仕事を運ぶ主婦の能力」(以上、p.85)、「村落共同
体には、臨機応変の働きをする指導体制」(p.88)。

上に掲げた諸事項のうちでは、生活場の外から新しいものごとを取り入れる革新が希薄である(革新として示した例は、「個の表現」または「差異化」に近い)。このことは、共同体の性格が濃い閉じた生活の特徴であろう。

(2) 配慮と経営の生活

H.H.ゴッセンによれば、生活で用いられる資源は限界効用均等の原理が作用して、さまざまな用途に精妙に配分される。また、I.カントによれば、私たちはさまざまな資源利用や行動からもたらされる「快」について、それぞれの大きさを比較することができる。こうした理解をふまえて、大熊信行は生活経営の概念を構築する⁴⁾。

大熊は、まず生活の各領域(衣・食・住など、調達・保存・環境整備など)に注目して、それぞれの領域に、「美しく衛生的に着こなす」「成人病を防ぐ食習慣を形成する」「週末と勤め帰りに食品を購入する」といった「中間的な目的」を設定する。そして、それぞれの「中間的な目的」を達成するために、時間・貨幣・財・労力等の「生活力」が科学的・合理的に配分され利用される。それぞれにおいて「最小費用」が目指されるのであり、この活動局面が「狭義の生活経営」である。

他方で、私たちは、自然・社会・経済・文化の状況に「緩急」自在に適応しながら生きる。そこでは、もっている生活力が惜しみなく使用され、「中間目的」の取捨選択も行われる。それが「生活の営み」である。

「狭義の生活経営」と「生活の営み」を通して、生活の究極の目的である「生命の再生産」が実現される。「広義の生活経営」であり、「中間諸目的を最小費用で達成すること」と「生活力を動員し最大の効果をあげること」が並進される。

O.F.v.ゴットル(ドイツ経営経済学)に依拠するこの生活経営観では、生活経営主体による配慮が大きな役割を果たす⁵⁾。大熊においては、主婦の配慮に頼るところがきわめて大きく、他方で家族による対話などの過程は見られない。また、他の組織(ゴットルの言う「社会的(経済的)構成体」)とのかかわりに、生活経営主体は関心を向けない。まして、企業、公的組織や互助的組織とのあいだにむすびつきが形成されるなかで生活の自由が変質することについて、懸念はない。

さらに気がかりな点もある。たとえば、異なる家族員のあいだで限界効用均等が成り立つのか。それとも、成り立たないからこそ生活経営主体の配慮に期待するのか。

あるいは、効用や「快」の量を慮ることが「生命の再生産」にどのように結びつくのか。たとえば、

遠くに飢餓にさらされる人々がいるのを知ることは、学習として効用の増加をもたらすかもしれないし、苦痛状況への共感によって効用の低下を招くかもしれない。「生命の再生産」が「労働力の再生産」を越えて人間性の成熟をも含むのであるならば、いずれの場合であっても、受動的な効用の増減から「生命の再生産」を得ることは期待できないのではないか。

本節で紹介した2つの生活観は、一定の社会的範囲内に閉じた生活を対象とし、生活が閉じていることに頓着しない。センが対象とする具体的な事例にも閉じた生活が含まれるかもしれないが、彼は閉じていることを是認しない。

3. 開かれた生活観

(1) ケイパビリティと関与

【ケイパビリティの諸要素】 前稿でも述べたが、A.センのケイパビリティ概念は以下の特徴を備える⁶⁾。

- ケイパビリティは、「価値があると認められる諸機能 (functions) の結合を達成する能力」のことである (“The Idea of Justice” (以下も同様)、p.233)。
- ケイパビリティ・アプローチの着眼点は、「ある人が現に達成していること (機能) ではなくて、できることがらすなわち達成の機会の選択」にある (p.235)。ケイパビリティは「選ぶことのできる機能に関するすべての情報」である (p.236)。そして、「説明の便宜のために個別のケイパビリティにふれることが多いが、その人に開かれている全体的なケイパビリティを見なければいけない」 (p.233)。
- ケイパビリティ・アプローチは、「個人の優位 (advantage) を判定し比較するために、情報面でのどのように焦点をあてればよいか」を示す。「その情報をどう利用するかという処方箋」を示すものではない (以上、p.232)。
- 社会や集団にケイパビリティがないわけではないが、「個人にかかわる特性」としてケイパビリティが着目される (p.244)。
- 達成された機能が同じでも、優位において異なる場合がある。たとえば、「空腹・栄養失調」と「宗教的・政治的理由による断食と飢餓」では、「自由と機会」をもつ後の方がケイパビリティは大きい (p.237)。
- ケイパビリティや機能は、「異質な対象を含みつつ評価される」 (p.239)。異なる対象のあいだの「通約不可能性」があっても、選択 (優劣・大小の比較) はできる (p.241)。
- ケイパビリティに関する評価は、「事前的」「一覽的」「固定的」に与えられるのではない。「日々続けられる吟味と対話の中で」、ある程度の「幅」をもって評価される。その意味で、ケイパビリティ・アプローチは「部分的な順序づけを信頼する」ところから始まる (以上、pp.242-243)。

雑然とした紹介であるが、ケイパビリティの本質または実体をとらえることは難しい。生産力や学力などのいわゆる「力」を把握することの困難がここにも見出される。しかし、ケイパビリティの表れはわかりやすく、全体的であれ部分的であれ、活動機会として示される生活行為群がそれである。

ただし、生活主体において思い浮かぶことがらのすべてがケイパビリティ (の表れ) というわけではない。自身の便利さや快適さを目指すあまりに不公平を増すような願望事項、あるいは商品や所得額だけで示される願望事項に、ケイパビリティは見出しにくい。正義と関与の視点が備わることが大切なのである。

【実践への関心と他者への関与】 ケイパビリティ・アプローチは、「社会的不平等の評価において、

(所得や幸福ではなく) ケイパビリティの不平等」を重視する (p.232)。そして、「自由と福祉 (well-being) を高めることによって正義を促進」する (p.81)。

生活の諸局面で十分に機能が果たされているかどうかは大切なことであるが、ケイパビリティにおいては、それが自由に運ばれているかどうかがいっそう大切である。先にふれたように、同じく空腹である場合に、それが飢えによるのと断食によるのとでは決定的に異なる。「移民してきた人々が母国の行動様式をとり続けるか新しい国の行動様式に従うか」は、いずれが選ばれるにしても自身で考えて判断する過程が十分に保障されていなければならない (pp.237-238)。あるいは、健康保険は、健康状態の向上そのものもさることながら、健康状態を向上させることへの関心を高める機会となってこそ有意義である (p.238)。こうした諸問題は、政治や人権の政策にもかかわる。

環境問題や持続的発展についても、自由とケイパビリティの観点から今生きる人々をエンパワーしつつ、将来世代のケイパビリティを高めることができる。たとえば、「学校教育の拡大と質の改善は環境についての自覚を高める」し、「女性の教育と雇用の拡大は出生率を下げ、地球の温暖化や自然生息地の破壊を長い目でみると減らすことができる」 (p.249)。

このように実践的な関心は、社会や他者に対して積極的に向けられる。その様子は、「関与」(コミットメント) として言い表せる。

関与できるのは、「どんな人も合理性から引き離されているのではなく」「一般的には、自分や他人の決定をわかったり確かめ合うことができる」 (p.178) からであり、「他人の願いや目指すことを思いやる」 (pp.192-193) ことができるからである。あるいは、「人間と他種、母と子のような非対称の関係においては、パワーをもつ側 (人間、母) には義務としてなすべきことがある」と考えられるからである (pp.205-207)。

関与は、立場や慣習などに規定された見方を相対化しようとする姿勢に支えられる。たとえば「女性を見下す伝統がある社会でこれを乗り越えるにはきわめて強い心の独立性が必要」 (p.162) とされるが、ケイパビリティ・アプローチは「ユートピア的な目的を超越的に押し当てるのではなく、ひとつずつ (よりよいものへと) 変えてゆくことによって乗り越え」 (p.169) る。

関与はまた、個人的な目標の抑制にも支えられる。人々は「自分だけの関心に限らない (利己的ではない) 目的を追求する」 (p.191)。たとえば、「受け入れられそうな寛大な行動ルールに従うのは、個人目的追求に抑制をかける」からである (p.192)。さらに言うと、目標が達成されることだけが大切なのではない。自由をめぐる論点に立ち戻ることになるが、「努力した結果ももちろんであるが、いろいろなことを含む包括的な結果」、とりわけ「選択の過程 (何をするかを決めることができる)」が大切である (p.215)。人々は、「他人に束縛されてある状態に入るのはないことを (いつも) 確かめておきたい」 (p.228) のである。

(2) 生活目標と時間

〔過去と生活目標〕 家庭科授業で、しばしば「自分史」が作られる。その際に、教師はさまざまに配慮する。たとえば、吉岡良江は、中学校卒業学年の生徒たちに自分史を作らせた。生徒はそれぞれに過去の出来事資料 (母子手帳、家族写真、卒業式や修学旅行の写真、地域の祭りの写真など) を選び、家族から説明を受けながら、「自分の成長と家族や家庭生活とのかかわり」(文部科学省学習指導要領) について綴った。その過程で、「生徒自身の行動ではないできごとや資料 (母子手帳など) をも利用する」「家族のコメントを活用する」「生徒の将来とむすびつける」「他生徒の前で発表しない」など、吉岡は多くのことを配慮した⁷⁾。あるいは、服部晃次と鈴木真由子は、「生い立ちに対して、自己開示したくない事柄があったり、受け入れられる準備ができていなかったり」することがあるため、「過去については、全てを書かせようとせず、良い思い出を振り返るなどして、これからの自分の為に過去を整理するとい

う手法に変え」た高校教師の試みを紹介する⁸⁾。これらの例では、過去のできごとや資料を介して将来が慮られる。

なお、自分史と対をなす手法の1つに生活設計がある。生活設計では、将来のある時点に課題を達成することが問われる。実行に先立って、＜将来時点の生活を見据えて問題や課題を探る→問題を回避したり課題を実現するために今なすべきことを考える→そのことによって将来の生活の問題や課題がどう変わるかを探る…＞というように、今における思考が展開する。ここにも過去がかかわっているのではないか。

[現象学からの示唆] こうした過程を、未来－現在－過去の入れ子的なかかわりに注目する現象学によって、やや精密にみておこう(図1を参照)⁹⁾。

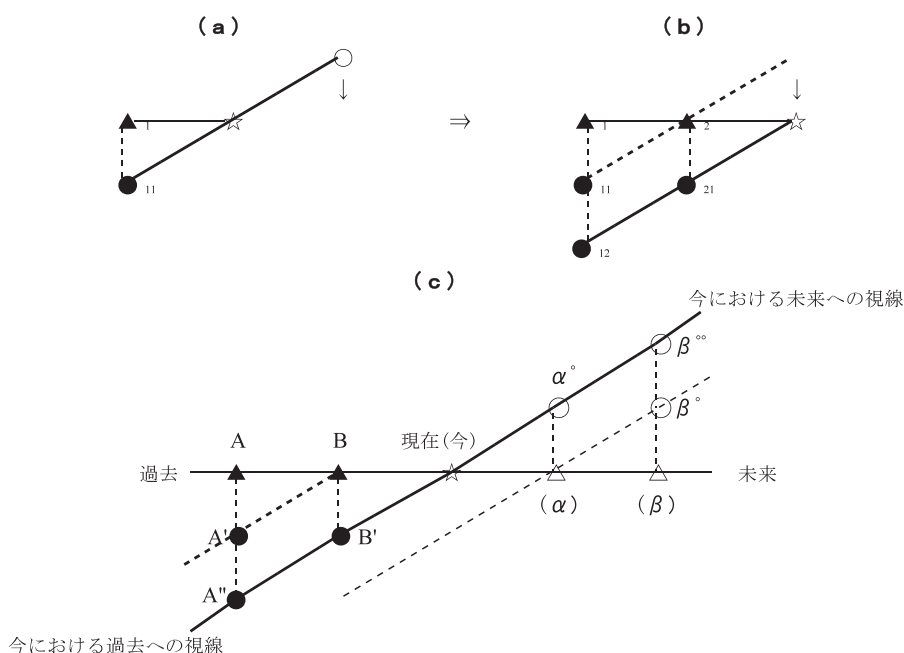


図1 過去－現在－未来

＜今、過去と未来を見る＞ 生き生きとした現在において、私は過去と未来を指向する*。

※例示

この論文を書いている私は、少し前に、時間に追われてパソコンのキーを叩き始めたことを思い起こす。他方で、この論文が納得できないものになることを恐れている。焦りと恐れの中、もっと以前のことももっと未来のことも思う。

図1-(a)は、今(☆) 過去を見ることについて示している。私は過去の一件を、できごとそのもの(▲₁)によってではなく、できごとの特質が映し出されている「射映」(●₁₁)を通して知る¹⁰⁾。同じく図1-(a)には、私が今(☆)、未来(○)を見ることも示されている**。

※※例示

- ▲₁ ……ためらったけれど思い切って頼んだら、ある野球選手がサインをくれた。従兄に笑われて恥ずかしかったが、うれしかった(50年前の事実)。
- ……来秋にも、論文を発表しよう。
- ₁₁ ……ためらいながらも来秋にも論文を発表しようと思う今(☆)、かつてためらったけれどサインをもらってうれしかったことが思い出される。

図1-(b)には、未来(図1-(a)中の○)がやがて今(☆)になることが示されている。前の今は過去

(▲₂)になり、前の過去はもうひとつ古い過去(▲₁)になる。そして、私は、射映(●₂₁)を通して過去のできごと(▲₂)をとらえる。また、射映(●₁₂^{***})を介して、前に見た過去のイメージ(●₁₁)や古い過去のできごと(▲₁)をとらえる。

※※※例示

●₁₂ ……今(☆)、ためらった末にサインをもらい恥ずかしかったけれど嬉しかったことが、また、サインについて前にも同じような思いにとらわれたことが、思い出される。

図1-(c)では、過去をも未来をも見渡している。「今における過去への視線」のもとに、かつて生き生きとした今の活動だった過去のできごと(▲)が、射映(●)として現れる。また、「今における未来への視線」のうえに、未来そのものが射映(○)として見出される。ただし、未来(たとえば○_{a'})はまだできごとになっていないが、やがて今(△_(a))になり、その後過去のできごとになってゆく。

<決意と生活目標> 図1-(c)には多くのできごとや斜映(▲、●、○)が展開するが、これらの相互関係(たとえば、▲_Aと▲_Bの前後関係、▲_A・●_{A'}・●_{A'}の内容)は、ときに理詰めで追究されることもある。しかし、それぞれに生き生きとした今の活動を経た事実とその射映であるので、これらの全体はおのずと「自然的かつ始元的に」(『知覚の現象学2』、p.318)関連づけられている。そのように、メルロー＝ポンティは言う。

また、「一度私が生まれてしまえば、私が何をしようと、私を通して時間が浸み出てゆく」(p.33)なかで、私は、今(☆)において決意することができる。決意された内容は、やがて過去になるできごと(▲)や射映(●)に宿ってゆく。また、決意された内容は未来(○)に投射される^{****}。そして、その未来が今に、今が過去になるとともに、できごと(▲)や射映(●)に反映されてゆく。

※※※例示

迷ったが少し前に、来秋にも論文を書くことに決めた(▲_B)。

今(☆)、少し前に決めたことを思い(●_B)論文を書くことを目指しているが(○_{a'})、50年前にためらった後にサインをもらったときの嬉しさが、また、サインについて前にも同じ思いに浸ったことが(●_A)、思いだされる(●_{A'})。

迷わないで、来秋にも論文を書こうと思う(○_{a'})。

[示唆] 以上より、できごと(▲)の配列—横軸—は客観的な年表のような意義をもつこと、ならびに射映(●)に支えられて生活経験の厚みをふまえて幾度も過去を振り返ることができることがわかる。また、決意して生活や人生の目標をもつことができること、ならびに目標が過去(▲、●)をとらえるよりどころになることがわかる。そしてまた、メルロー＝ポンティは未来(○)を思い描くことに寄与できるのは過去(▲、●)だと言う。

たとえば母子手帳という事実資料(▲)について、生徒には見るたびに新しい気づき(●)がある。自身の行動ではないために家族からコメントを得るが、コメントを受けること自体が新しいできごと(▲)であり発見や感慨(●)がもたらされることであろう。そうした気づきや感慨を、今(☆)、将来の目標(○)とかかわらせながら綴ってゆくことができよう。あるいは、生活設計における現在と未来の往復は、図1-(c)(☆と○_{a'}の間の斜線部分)に位置づけることができる。

4. 生活目標としてのケイパビリティ

本稿では、多様に展開する生活観のうちから、4つの例を示した。それぞれに論じられるきっかけと主題を異にしており、論じられるスタンスも異なる。スタンスについて言うと、2-(1)は、生活の外にいる考察者が生活の内の事実を知ろうとしている。それに対して、2-(2)および3-(1)は、生活の外

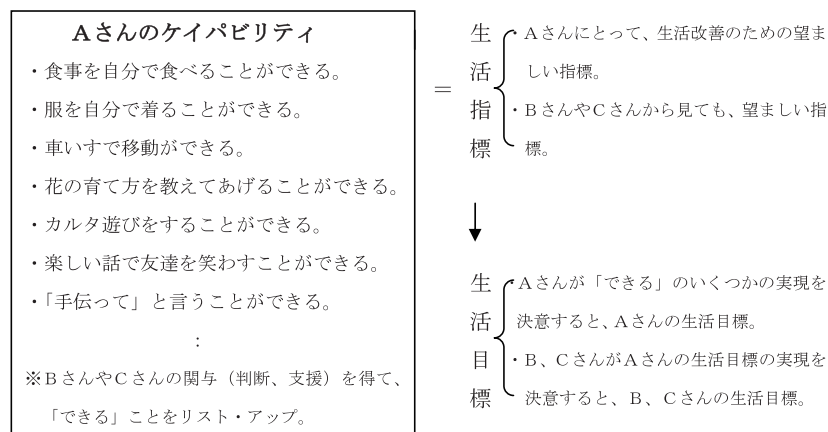


図2 生活指標から生活目標へ

にいる考察者が生活の内にいる主体に実践を説く。そして、現象学の成果を示す3-(2)は、「生活の内にいる考察者が生活の内にいる自身の事実を知ろう」とするものと言ってよいであろう¹¹⁾。

4つの例は、互いに示唆し合う。とくに3-(1)は、2-(1)、(2)に対して、考察の関心が家族や地域などの共同体内の生活に限られていることを警告し、社会に開かれることの必要を訴える。その3-(1)に対して、3-(2)は、ケイパビリティを厚生経済学における不平等把握の生活指標にとどめるのではなく、人生や生活場の時間的展開に位置づけられ生活者自身が実現を図ろうとする生活目標としてとらえるよう示唆する(図2を参照)。と同時に3-(2)は、2-(1)の「ものがたり」や「伝統」が過去に籠もることなく、今ないし日々の体験の厚みによってとらえ返されて未来に示唆や励ましを与えうることを教えてくれる。

図2を補って言うと、Aさんが「できる」ことのいくつかを実現しようと決意するとき、生活指標であるケイパビリティはAさん自身の生活目標になる(そのときBさんやCさん(自分史作成の例では、生徒に助言する家族や教師にあたる)がAさんに関与しようと決意すると、「Aさんの『できる』の実現を支援すること」がBさんやCさんの生活目標となる)。生活目標の実現をめざすなかで、Aさんは新しい目で、決意した当時やそれ以前を見る。そのようにふりかえられる過去によって励まされたり目標の内容を与えられながら、未来を見る。

ケイパビリティ・アプローチは、J.ロールズにおける「初期状態」「無知のヴェール」「再分配」などの正義をめぐる制度論の修正、A.スミスやJ.J.ルソーらの超越主義に対する批判、そして厚生経済学の展開という社会的な次元で議論される¹²⁾。その意味で、個別の生活者に「処方箋」を準備することまではセンの意図するところではないが、この作業が生活経営学に社会的な視野をもたらしてくれることは間違いない¹³⁾。

[注]

- 1) 乗本秀樹「生活目標反省の一視角—潜在能力アプローチによる示唆—」、『三重大学教育学部研究紀要(社会科学)』第66巻, 2015年。
- 2) 長嶋俊介・乗本秀樹共編『家政知を考える』, 昭和堂, 1989年。
- 3) 横川公子「衣の生活と家政知」(同上書, 所収)。
- 4) 大熊信行「新家政学」(亀高京子・石川寛子監修『家政学・生活学研究基礎文献集第9巻』(大空社, 1988年)に復刻, 原著は1943年。)などを参照のこと。以下は, 乗本秀樹「大熊信行における『配分』概念の展開と生活経営論」(『日本家政学会誌』第57巻2号, 2006年)の要約による。

- 5) O.F.v.ゴットル (福井孝治校閲, 西川清治・藤原光治郎訳)『経済の本質と根本概念』, 岩波書店, 1942年.
- 6) Amartya Sen “The Idea of Justice”, Penguin Books, 2009. 本文中の引用は, 同書 (拙抄訳) からのものである.
- 7) 吉岡良江「中学校家庭科『家族と家庭生活』の指導に関する研究」, 三重大学大学院教育学研究科修士学位論文, 2004年.
- 8) 服部晃次・鈴木真由子「家庭科教育における『自分を見つめる』学習の配慮事項の検討」(大阪教育大学紀要第V部門第61巻第2号, 2013年2月), p.89.
- 9) M.メルロー=ポンティ(竹内芳郎・木田元・宮本忠雄訳)『知覚の現象学2』(みすず書房, 1974年)およびJ. F. リオタール(高橋允昭訳)『現象学』(白水社, 1965年)に注目する. 図1は, 両文献をもとに作成している.
- 10) メルロー=ポンティは, この過程を「そのうえを流れ過ぎる水を通して小石そのもの(▲)を見るようなもの」(括弧内は引用者)という(前出『知覚の現象学2』, p.317).
- 11) 前掲1)の「生活目標考察のパターン」(p.110)を参照のこと.
- 12) ロールズについては, ジョン・ロールズ(矢島欽次監訳)『正義論』(紀伊国屋書店, 1979年), 土屋恵一郎『正義論／自由論』(岩波書店, 2002年)を参照のこと.
- 13) すでに, 石田好江は生活経営学の展開とケイパビリティ概念をむすびつけて論じている. ただし, 同氏において, 「生活目標」への言及はない. 石田好江「生活経営学におけるケイパビリティ・アプローチの可能性」(『生活経営学研究』No.49, 2014年)などを参照のこと.

【追記】3-(1)は, 日本家政学会中部地区家政学原論部会・生活経営学部会合同研究会での報告「生活目標とケイパビリティ」(2015年4月25日, 名古屋市カネジュービル)をとりまとめたものである. また, 3-(2)は, 第58回日本家政学会中部支部大会での報告「模式図による自分史と生活設計の理解」(2013年9月7日, 名古屋女子大学)をとりまとめたものである.